

## 提 言

## 子どもの個性・発達と環境

森川昭廣 (群馬大学/北関東アレルギー研究所)

長いことアレルギー疾患を持つ子どもさんを診ていて、お母さん方から“うちの子は落ち着きがない”、“忘れ物が多い”ことを相談されます。最近、アレルギー科を標榜して成人の患者さんも拝見していますが、そのような方はお見受けしません。アレルギー疾患を持つ子どもの一部には明らかに多動性があり、衝動性が認められます。“落ち着きがないです”、“あわて者です”とか、“不注意な子なんです”と親御さんは述べられる。小児精神の専門家に相談すると、発達障害のうち、第3群の軽度発達障害、多動・衝動型でよいと言われる。注意欠陥多動性障害(ADHD)は基本的特徴として、行動コントロールの難しさ(多動性、衝動性、不注意)があり、幼児期からの多動、学童期の注意散漫、忘れ物が多いが、軽度の者は次第に症状が改善する。発達障害の定義は杉山登志朗先生によれば、“子どもの発達の途上において、発達の特定の領域に社会的な適応の問題を引き起こす可能性のある凹凸が生じたもの”としている。社会が窮屈になり、画一性が常識となった今、軽度の発達障害児は一つの個性としては周囲が認めてくれにくくなっている。一つの個性として暖かく見守ることが重要と思う。また、この中に成育環境が劣悪な患者さんがおられる。家族崩壊等による愛着障害や経済の悪化による成育環境の劣化、そして一部に心理的・肉体的虐待も見受けられる。子どもは柔軟性に富む。一小児科医としては社会や家庭がもう少し余裕をもつことで豊かな個性を病気の方向ではなく、優れた個性として見てゆけるのではないかと思う。何よりも子どもが健やかに成長・発達する環境をいかにして創り出していくか、日本の次代を担う子どもに物理的環境(狭義のエコ)のみならずそれを含んだ社会的環境(広義にエコ)を創っていくことが、個性豊かな人々が支える日本の将来に重要なように思われる。



個性

写真提供 森川昭廣